



- タイトル** : 「超看板 SIGNS & BEYOND Vol.2」
- 会 期** : 2020年1月10日(金)～1月19日(日) 10:00-19:00
- 会 場** : 村世界 〒151-0062 東京都渋谷区元代々木町22-7 1F
[Google Map https://goo.gl/maps/izyMpTkGprnjT1sE6](https://goo.gl/maps/izyMpTkGprnjT1sE6)
- 観覧料** : 無料 (トークイベント各回入場料¥1,000、要予約、定員30名)
- 企画制作** : 廣田碧(看板屋、グラフィックデザイナー)
- コラボレーター** : 岩田拓朗(テクニカルディレクター) / 加藤正基(建築家) / 山本祐一(ネオンペンダー)
- トークゲスト** : やんツー (メディアアーティスト) / 家成俊勝(建築家) / 大原大次郎(グラフィックデザイナー)
- 助 成** : 一般財団法人おおさか創造千島財団
- 概 要** : 「超看板」は、建築家、デザイナー、アーティストなど、異なる分野で活動するコラボレーターと協働し、既成概念にとらわれず、「看板 = サイン」を広義に捉え、そのあり方や可能性について様々な角度から考察、探求するプロジェクトです。前回開催から3年ぶりとなる本展示では、東京「村世界」を会場に、札幌文化芸術交流センター[SCARTS]テクニカルディレクター・岩田拓朗、建築家・加藤正基、ネオンペンダー・山本祐一をコラボレーターに迎え、新しいサインプロダクトのプロトタイプを製作し、そのプロセスとともに展示いたします。さらに10日間の会期中にはゲスト&コラボレーターとのトークセッションも開催いたします。

町の風景は時代とともにさまざまに変化していきます。建物や公園、植えられた、あるいは自生している木々や花などの植物やその町で生活する人々に加えて、看板もその表情の一部として存在しています。多くの看板は商業的な目的で置かれたものでありながら、時間の経過とともに、町のランドマークになったり、新しい役割を担うこともあります。また、グラフィティなどのストリートカルチャーもそうした一面を持つことがあります。「超看板」は、看板だけでなく、同様の役割を担ったグラフィティやグラフィックデザインなども含め、「看板」を広義に捉え、公共空間におけるその役割や機能、可能性について考察し、その考察をもとに様々なコラボレーターと協働して新たな看板を製作する試みです。それぞれの興味のおもむくままに手を動かしながら思考し、できたかたちを分解し、もう一度組み立ててみる、もしくは、人の何気ないしぐさや日々の風景の小さな気づきと違和感にじっくりと向き合い、思いめぐらせてかたちをつくってゆく、その行ったり来たり留まったりのうちに、看板の持つ可能性を見出すことを試みていきます。

看板を取り巻く技術は時代によって変化し、手描きの職人の数も減少しているものの、その中には埋もれてしまっているユニークな技術がいくつもあります。「超看板」は、それらの技術を無理に遺すのではなく、新しい用途や転用を通じてその価値を見出していく試みでもあります。アメリカなどでは、職人の養成訓練や技術についてのディスカッションがインターネット上のみならず、実空間でも盛んに行われています。「超看板」が、一人でも多くの人にとって看板について考える機会となり、今後、日本でもそうした議論の場やネットワークづくりのきっかけになればと考えています。



主宰プロフィール

廣田 碧 Midori Hirota

(看板屋／グラフィックデザイナー)

〔看太郎〕

デザイン事務所でグラフィックデザイナーとして活動後、2015年から家業である看板屋「看太郎」の2代目を継ぐ。店舗やブランド、イベント、展示などのロゴ・VIのデザインを手がけながら、看板を主軸に、手描きのレタリングやドローイング、グラフィックといった平面のデザインを、さまざまな素材・媒体を用いて空間へ展開することを試み、デザイン→製作→施工までの工程を一貫して担う。看板が持つメディアとしての可能性を探究するための自主企画として『超看板vol.1』を2017年に開催、現在は衰退しつつある看板のペイント技術の普及も目指している。

www.kantaro-signs.com



関連イベント

超看板トークセッション①

2020年1月12日(日) 14:00-16:00

岩田拓朗(テクニカルディレクター)／

やんツー(メディアアーティスト)／

廣田碧(看板屋、グラフィックデザイナー)

超看板トークセッション②

2020年1月19日(日) 14:00-16:00

家成俊勝(建築家)／

大原大次郎(グラフィックデザイナー)／

廣田碧(看板屋、グラフィックデザイナー)

※追記 トークセッション①は廣田本人の体調不良のため中止となりました。

各回 入場料 ¥1,000、要予約、定員30名

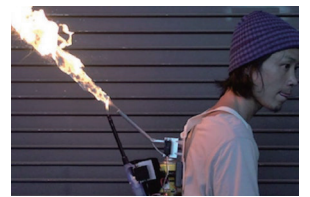
参加ご希望の方は、①お名前 ②ご住所 ③連絡先電話番号 ④参加を希望される回をご記入の上、メールにてお申し込みください。(ask@kantaro.jp)

※いただいた個人情報は、当イベントに関するご連絡等以外の目的には使用いたしません。

コラボレーター

岩田拓朗 Takuro Iwata (テクニカルディレクター)

1982年山口県生まれ。2003年山口情報芸術センター[YCAM] 開館以来、研究開発チーム YCAM InterLabに在籍。舞台芸術およびメディアアートの領域でステージマネージャー、エンジニア、テクニカルディレクターとして多数の作品制作に携わる。2016年には文化庁在外研修制度を活用し、ドイツ・ベルリンにてART+COMのプロジェクトに参加。2018年4月より札幌文化芸術交流センター[SCARTS]にテクニカルディレクターとして着任。個人の活動としても、アーティストとのコラボレーションによるクリエイションを国内外で積極的にこなしている。



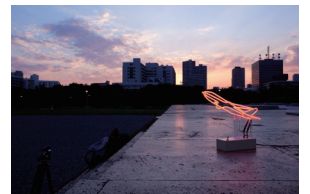
加藤正基 Masaki Kato (建築家)

1986年広島生まれ。2011年近畿大学大学院総合理工学研究科修了後、TERUHIRO YANAGI-HARA/を経て2013年より個人による活動を開始。2015- 京都造形芸術大学非常勤講師
www.masakikato.jp



山本祐一 Yuichi Yamamoto (ネオンペンダー)[maverick]

1972年大阪生まれ。15才の時アメリカンネオンアートの第一人者Michael Flechtnerに出会いネオンアートの魅力に引きつけられる。以来ネオンサインの製作に従事する一方、2011年よりオリジナルデザインプロジェクト「oncan」を立ち上げネオンの魅力を発信し続けている。2015年には、SLOPE GALLERY(千駄ヶ谷)や、GREEN ROOM GALLERY(鎌倉)で開催された「THE NEON WORDS」展にて、アーティスト豊田弘治氏とのコラボレーション作品を展示。
www.neon-maverick.com



トークゲスト

やんツー yang02 (メディアアーティスト)

1984年、神奈川県茅ヶ崎市生まれ。2009年多摩美術大学大学院デザイン専攻情報デザイン研究領域修了。デジタルメディアを基盤に公共圏における表現にインスパイアされた作品を多く制作し、行為の主体を自律型装置や外的要因に委ねることで人間の身体性を焙り出し、表現の主体性の問う。
www.yang02.com

大原大次郎 Daijiro Ohara (グラフィックデザイナー)

1978年神奈川県生まれ。グラフィックデザイン、展覧会、ワークショップなどを通して、言葉や文字の知覚を探索するプロジェクトを多数展開する。近年のプロジェクトには、重力を主題としたモビールのタイポグラフィ〈もじゅうりょく〉、ホンマタカシによる山岳写真と登山図を再構築した連作〈稜線〉、音楽家・蓮沼執太、イルリメと共に構成する音声記述パフォーマンス〈TypogRAPy〉などがある。
www.oharadaijiro.com

家成俊勝 Toshikatsu Ienari (建築家)[dot architects/ 京都造形芸術大学空間演出デザイン学科 教授]

1974年兵庫県生まれ。2004年、赤代武志とドットアーキテクツを設立。アート、オルタナティブメディア、建築、地域研究、NPOなどが集まるコーポ北加賀屋を拠点に活動。建築設計だけに留まらず、現場施工、アートプロジェクト、企画にもかかわる。代表作はUmaki Camp(2013、小豆島)、千鳥文化(2017、大阪)など。第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展(2016)にて審査員特別表彰を受賞(日本館出展作家)。
www.dotarchitects.jp

問合せ先:

超看板 SIGNS & BEYOND 広報事務局(C株式会社)
 中田 nakata.sera@c-hd.jp

超看板 SIGNS & BEYOND Vol.2 概要
www.kantaro-signs.com/sbvol2.pdf